

ノーモア・ヒバクシャ通信 第39号

2018年3月29日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

★もくじ

I. 第6回通常総会のご案内 (予告)	1
II. 被爆者運動に学び合う学習懇談会 (シリーズ10) のお知らせ	2
III. 長期計画委員会の報告	2
IV. 被爆者運動に学び合う学習懇談会 (シリーズ9) の報告	2
V. 各部会、作業グループの取り組みから	6
VI. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクト	8
VII. 【奈良】「ぴーすかふえ」で県内原爆被害者の歩みの掘り起こしを報告	9
VIII. 「通信」に関するアンケートへのご協力のおねがい	9

I. 第6回通常総会のご案内 (予告)

この会はNPO法人として6年が経ちました。税制優遇措置が適用される「認定NPO法人」を東京都に申請しており、「認定」を得て組織・財政上もさらに充実強化し、その社会的役割を大きく力強く発揮することが求められています。昨年は、核兵器禁止条約の採択、ICAN (核廃絶国際キャンペーン) のノーベル平和賞受賞があり、そこでは被爆者が「受けきれがたい苦しみと被害」に遭遇しそれを背負いながらも、核廃絶に向け営々と被爆体験を伝え続けてきた被爆者の思いと行動が大きな影響を与えたこと、これが改めて強調されています。

今こそ被爆者の皆さんの思いと歩みを、受け継いでいかなければなりません。そのために、「継承センター」設立の実現を図ります。

来る第6回通常総会について、次のように予告します。(正式なご案内は後日送ります。)

- ◆ 日 時 5月26日 (土) 午後1時から3時
- ◆ 会 場 東京四谷主婦会館プラザエフ 5階会議室
- ◆ 議 題

《審議事項》

1. 2017年度事業報告 (案)
2. 2017年度決算 (案)、監事監査報告
3. 「継承センター設立のための提言 (仮称)」 (案)

4. 定款の一部変更（案）
5. その他

《報告事項》

1. 2018年度事業計画及び予算
2. その他

II. 被爆者運動に学び合う学習懇談会のお知らせ

シリーズ10「被団協文書調査報告～「被団協速報」を読む～」

継承する会の「被爆者運動に学び合う学習懇談会」も、今回は10回目。4月14日（土）に、愛宕事務所で2013年から被団協運動史料の整理をご指導いただいている松田忍さん（昭和女子大・歴史文化学科准教授、日本近現代史）が、「被団協文書調査報告～「被団協速報」を読む～」と題して報告されます。急なお知らせですが、ぜひ多数お誘いのうえご参加ください。

〔詳細・申し込み方法は、同封の案内チラシを参照ください。できるだけ事前のお申し込みをお願いします。〕

III. 長期計画委員会の報告

継承センター設立のための長期計画委員会は、3月24日（土）第5回目の会合を開催し「提言」をまとめ、4月28日開催の臨時理事会に報告し、第6回通常総会議案として確認される予定です。デジタル・アーカイブの構築と運用費用、継承センターの建設や運営、設立資金と募金活動などについて検討、討議を重ねてきたものです。

IV. 被爆者運動に学び合う学習懇談会＝シリーズ9＝

“「被爆者として言い残したいこと」から何を学ぶか”をテーマに

被爆者運動に学び合う学習懇談会の9回目は、被爆70年の2015年に日本被団協と協力して実施した調査の報告書“『被爆者として言い残したいこと』（2017年10月刊、頒価200円）から何を学ぶか”をテーマに、2月3日（土）午後、プラザエフ5階の会議室で開催されました。（日本被団協と継承する会との共催）

はじめに、調査報告書のとりまとめにあたった八木良広さん（愛媛大学教育学部特定研究員）と根本雅也さん（立命館大学鬼怒川総合研究機構プロジェクト研究員・学術振興会特別研究員）から今回の学習懇談会の趣旨と調査報告の概要について問題提起。それを受けて、この調査に回答された被爆者や調査結果の入力・集計に携わった協力者を含む32名の参加者が熱心に議論に参加しました。

【問題提起の概要】

八木さんは、まず、被爆者団体が被爆者を対象に実施してきた調査は、原爆被害の実相の解明、活動の実施・運動の展開、国や自治体への政策提言、被爆者の掘り起しなど多様な目的をもって行われてきたこと、そこには、被爆者自身が被爆者について学び、理解を深めるとともに、被爆者でない者にとっては学びの場になるという「被爆者になる過程」が存在した、とその意義を紹介し、今回の調査ではそうした機会が限られていたので、この学習懇談会を自由に議論し相互理解をはかる場としたい、と述べました。

調査結果の概要については、おおむね次のような点が指摘されました。（詳しくは報告書を参照）

1. 回答者 706 名は数としては少ないが、回答された文章を読みながら対峙すると、迫ってくるところがある。回答者集団の特徴としては、被爆時 9 歳以下の年齢層が増えており、それにより 2005 年に実施した「わたしの訴え」と比較して、10 年間の経年変化の大きな項目がみられる。

2. 各設問に対する回答の特徴

○ 「あの日」の記憶：「死の姿」「苦しむ姿」を選択した人や、家族だけでない人間の「死の姿」「苦しむ姿」についての描写が多く、「何もできなかった」という心情につながっている。「あの日」に見たこと、体験したことは、後の問（心にかかっている、政府に求めたい、言い残したい、など）に対してもくり返し出てくる。いわば被爆者の考え方をつくる原点になっている。



○ 被爆時 9 歳以下で被爆し「あの日」の記憶がなくても、問 2（つらかったこと）以下の回答をみれば、何もなかったわけではない。差別や病苦など、被爆者であることに変わりはない。

○ 生きる支え：60 年調査にはない、入れたかった項目だが、聞いてよいのか迷いもあった。「家族に囲まれ」「生活安定」「仕事」など、ありふれた生活のなかで望まれる項目を選択した人が多いが、それは実現できなかったことの裏返しでもあろう。「核廃絶」「実相普及」を生きがいとする人たちが 3、4 割いる一方で、生きがいをもてず、聞かれることがつらいという人も。書いてくれてありがたいと思うとともに、申しわけない思いもした。

○ 心にかかっていること：もう一度日本が戦争するのではないかという危惧が 10 年前より 10 ポイントも高い。そこには、安保法制が強行されようという時代状況の反映だけで

なく、原爆をもたらした戦争への反対、被爆者の怒りが感じられる。

○ 原爆被害はがまんでできるか：9割が「がまんでできない」と回答。その根底には原爆体験そのものがある。同時に、「受忍」すれば国が起こした戦争を認めることになり、再び戦争が起きることになるという戦争批判の声も。「がまんでできる」「わからない」と答えた人たちも、そこには割り切れない、複雑な思いが込められている。

○ 日本政府に求めること：核兵器廃絶や実相普及を上回る3/4以上が「9条を厳守し戦争によらない国づくり」を選んでいいる。10年前と比べて、「原爆被害者の基本要件」の二本柱のうちの「国家補償」が10%減。国が戦争を起こしたから原爆被害を受けた、国が被害を補償することは国が戦争責任を認め、原爆被害を受忍させないと約束することだが、国家補償の問題が被爆者のなかでどうとらえられているのか疑問に思った。

○ 自由に記述してもらった「言い残したいこと」では、原爆は許せない、戦争を起こさせないということが強調され、戦争で死んだ人たちが無駄死にならないよう死に意味を与えること。そのためにも9条を守り、人間の命と生の重さ、生き残った者の責務を問いつづけてきた70年だったことが伝わる。若者に対しては、自分で考えものをいうことの大切さが強調されている。

○ 被爆者の会の役割：被団協結成60年（2016年）を前に、初めて入れた設問だったが、想像以上に、被爆者にとっては日本被団協や被爆者の会、被爆者運動の役割が大きく、今後さらに深めていきたい。情報が入り、仲間と気兼ねなく話し合える。先達がいて、被害者の団体に結集して行動していくことの大きさは、他の社会問題にも参考になる。

【討議の概要】

○ （調査に参加した人から）被爆者の直筆の文章を読ませていただいたのは貴重な経験だった。抱いていたイメージとは違い、普通のトーンで書かれた文章に、ものすごい中身が詰まっている。「校庭で人を焼く臭いが、今も風邪をひくと甦ってくる」。原爆とともに生きてこざるを得なかった、日々思い出していることばが強烈に残っている。

○ 1歳被爆、家族に死者やケガをした人もいない幸運な被爆者だ。「被爆者になる」というのはそのとおり。最初は何も分からず及び腰で参加したが、だんだん分かってくる。生き残った者の責務として、何も言えず亡くなった被爆者のために運動をつづけたい。

○ 調査の目的と意義に「被爆者が被爆者について学び理解を深める」「被爆者になる過程の存在」とあるが、自覚していなかった。書かれていることは、胎内で被爆した自分はほとんど知らないことだが、被爆者が何を思い、何を感じて生きてきたのか、貴重な資料だ。戦争を起こさせないために、核兵器をなくすことと9条を守ることはイコールだという被爆者の危機感をどこまで伝えられるか、いろんなところで紹介したい。

○ 読んだとき、これはすごいと思った。70年前の経験と70年経った今の現状を伝える被

爆者の証言集だ。被爆者自身が読んで、自分のことだけでなく、原爆被害についての多くの人たちの体験を含めて広島・長崎は何だったのかを伝えること。被爆者でない人にも、被爆者は70年をどうたたかい、どう考えているのかが伝わる記録。なるべく多く普及したいと思う。

○ 被爆70年の多くのメディアによるアンケートでは、被爆者はアメリカへの謝罪を（まだ）求めるのか、という問いが共通していて、何で原爆を免罪しなければいけないのかとつよく違和感を抱いた。アメリカが核兵器を捨て、日本がその後押しをするようになるまでは、絶対、謝罪要求を取り下げることはない、と報告書を読んで改めて思った。

○ 国家補償要求は、国が戦争責任を認めて謝罪し、ふたたび被爆者をつくらない証になるもので、本来、戦争しない国になることと直結している。そのことが94年12月に制定された現行法以降、分かりにくくなっている。国家補償は政治的で言いにくい、核兵器廃絶署名は世界平和一本でとりくみやすい、という意見があるが、いま、禁止条約を発効させるには、各国が国内法に基づいて批准することが必要だ。政府に条約に署名し批准するよう迫ることは極めて政治的なことだ。

報告書の「おわりに」に書かれているように、「禁止条約に署名せず「核の傘」にしがみついた政策と、原爆被害の反人間性を直視せず国家補償を拒否しつづける政策の根っこはひとつ」。二大要求を結びつけていくことが大事だ。

○ 原爆被害について、国は責任を認めず放ったらかしてきた。今の法律は、国の責任を正面から問うたものではない。被爆者がいなくなっても、国が謝罪も補償もしなかったという事実は厳然として残る。後の世代が処理しなければならない国民の課題としてのしかかっていくことになる。

○ 核兵器禁止条約には「人間として容認できない苦しみと被害」と記されているが、日本政府は原爆被害をこのようなものとして認めてはいない。「基本要求」で謳ったように、被団協は、原爆は人間と相容れない「反人間的な兵器」だと言い続けてきた。これを実相普及の中心において、そのような被害をもたらす核兵器の禁止と、被害への国の償い（の二大要求）を結びつけていくべきだろう。

○ 被爆40年調査の企画・設計の原動力の一つは、死没者・遺族調査で原爆死とは何だったかの仮説を見つけることができたことだった。調査に携わった研究者には、下請けの経験に終わらせず、次の調査につながる知見や仮説を見出してほしい。被団協には、研究者を無駄に使わずに、若い人たちが生き生きと活動できるよう、これだけの成果と協力者を生かしていく場をつくってほしい。

今回の回答者が700人余りだったことについては、なぜこれだけしか集められなかったのかを、被団協も継承する会も組織としてつめてほしい。

○ 生の証言・記述を読んで、迫ってくるものがある。これを非被爆者が自分の問題とどう地続きにとらえていくか。有意義な調査をどう生かしていくか、趣向、工夫が必要だ。

国連も最終的には被爆者の証言や存在が動かしていった。原爆被害は人間に何をもたらすのか、柔軟に掘り下げて考えていく。「人は何のために生き産まれて来るのか」ということばがあったが、それを根本的に問うてくるのが原爆というものではないか。

○ 八木：ことばの上では「国家補償」ではなかったが、自由記述の「戦争しない国」「受忍できない」は「基本要求」の国家補償要求に盛り込まれたエッセンスであり、これこそが「言い残したいこと」なのかな、という気がしている。

いろいろな課題を与えてもらい、今日は僕たちのための会だったように思う。報告書をまとめながらも迷っているところ、十分に目配りのできなかつたところも含め、改めてどのように生かせるかブラッシュアップして、一人一人のことばを研究者としてもっと分かりやすいことばで伝えていきたい。

○ 根本：被爆者団体の意義、被害者にとって被害者の会は何を意味して来たのか、をもう少し詳しく調べていきたい。

コメントに書いたことを自分の課題として考えていきたい。一人一人のことばの意味をさらに追究し、つねに抱えていかねばならないと思っている。

※ 杉並区の被爆者の会・光友会では、調査報告書 150 部を購入して結成 60 周年のつどいや日本被団協の藤森俊希事務局次長を招いての講演会で配布、活用を呼びかけました。

報告書は 1 部 200 円。さまざまな場でご活用ください。申し込みは日本被団協 (FAX 03-3431-2113 e-mail:kj3t-tnk@asahi-net.or.jp) または継承する会へ。

V. 部会、作業グループの取り組みから

■ 資料庫部会

(1) 故・小西悟さん（日本被団協国際部長）の資料をご寄贈いただきました

1980 年代から日本被団協の国際部長として被団協が独自の国際活動を展開する中心となって活躍された故・小西悟さん（広島被爆、2015. 4. 22 死去）のご遺族（妻・洋子さん）より、2 月 21 日、遺された資料のご寄贈をいただきました。

①ドイツ、オーストリアをはじめとするヨーロッパを中心とした世界への遊説の記録や国際会議での報告・資料、写真、作成した文書のデータ、などの運動資料（段ボール 11 個分）、および②自身の体験にもとづく証言による構成劇「一九四五年八月六日」のシナリオや公演パンフ、各国への遊説報告書など、冊子や書籍類（段ボール 3 箱分）、計 14 箱もの資料です。

先に寄贈いただいた肥田舜太郎さんの資料と合わせると、被団協が解明してきた原爆被害の反人間性をもとに、核兵器は凍結や抑止ではなく廃絶するしかないと訴えてきた国際活動に関わる主な資料がそろったこととなります。

亡くなられたときにドイツの平和活動家ギド・グルネバルトさんが、寄せられた追悼メッセージを編集した『小西さんの思い出』には、70年代後半から2005年にかけて、各地で出会った平和活動家らと小西さんをはじめとする被爆者との交友が、温かく信頼に満ちたものであったことが生き生きと綴られていて、こうした長い時間をかけた世界への種まきが国連での核兵器禁止条約につながったことが実感されました。

荷物を送り出したとき、洋子さんが「これからの整理が大変でしょうが、胸の重荷がおりたような気がします」と言ってくださり、これらの資料を多くの人たちに活用していただけるようにしていく責任をひしひしと感じました。

たくさんの貴重な資料のご寄贈に心より感謝申し上げます。

(2) 愛宕事務所で 春休みの被団協史料整理作業おわる

今年も2月24日から、昭和女子大学の学生さんたちの協力で、春休みを利用した被爆者運動史料の整理作業が行われました。今回は、昨年10月に寄贈いただいた故・肥田舜太郎さんの資料の整理と目録どりを中心に行い、後半には、長く日本被団協の国際部長を務めた故・小西悟さんの資料も加わりました。3月17日までの5日間の作業には、学習院大学の学生さん2人も含め、のべ24名が参加しました。

自ら被爆し被爆者医療に携わってきた医師として、中央相談所理事長として、埼玉の「しらさぎ会」の会長として、多様な活動をしてこられた肥田先生の資料は、内外の医学論文、相談記録、書簡、インタビュー記事、自分史関連資料、講演記録など多岐にわたります。度々出かけた海外での反核遊説活動のたくさんの写真や綿密なメモも残されています。

学生さんたちは、ときに英語やドイツ語と格闘したり、興味をひかれた資料に見入ったりしながら、劣化したホチキスや写真に貼られたセロテープなどをていねいにはずし、一つ一つの資料を封筒に入れて行きます。

作業の合間には、学年や学科、学校の枠を超えた楽しく実のあるおしゃべりも。「高校までの教科書には、原爆のことは3行しかのっていなかった」「歴文（昭和女子大の歴史文化学科）に入って、近現代史を学ぶ大切さが初めて分かった。今を見ているだけでは見えないが、歴史を学ぶことで、自分がどのように生きていけばよいか分かってくる」という2年生のことばに、1年生もうなずきながら聞き入っていました。

最終日には、昨春卒業された先輩も参加。ヒバクシャ国際署名をしたり、70年調査の追加の聞きとりへの参加を申し出てくれる人たちも生まれてきています。

被団協運動史料の内容を社会に発信し継承するとりくみも

2013年から始まった被団協史料整理を指導してくださっている松田忍先生(昭和女子大学 人間文化学部 歴史文化学科 准教授)は、「歴史学と博物館学の知見を活用して、戦後史料の整理・保存に関わり、その内容を社会に発信することで、次世代へと継承してい

くことをめざす」4年がかりのプロジェクトが新年度から始まります。

被団協関連文書を中心に学生が主体となってミーティングや資料の読み込み、関係者からの講義・聴取などにとりくみ、学園祭や学内での企画展示を重ねて、最終年には大学の光葉博物館での史料展示や展示企画のパンフレット作成、講演会などの企画も行う予定、といえます。

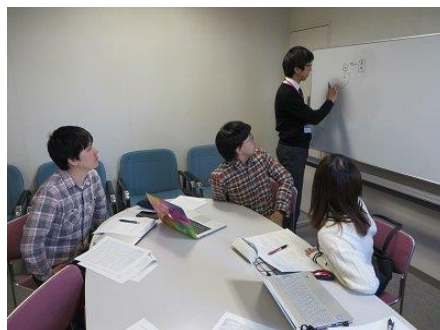
被爆者たちの生き方や運動の記録が、こうした学生さんらの学びの刺激となり活用されていくことになれば、と期待されます。

VI. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクト

若い受け継ぎ手の皆さんががんばっています。

(1) アーカイブ化プロジェクト

2/13(火) コーププラザ浦和で、19日に予定している「未来につなぐ被爆の記憶」アーカイブ化PJの3回目のトライアルに向けて打ち合わせを行いました。システム制作を担当している首都大学東京の大学院生、ボランティアの大学生、PJ事務局（日本生協連）など5名が参加しました。【写真右上】



2/19(月) コーププラザ浦和で、「未来につなぐ被爆の記憶」アーカイブ化PJの3回目ワークショップのトライアルを開催しました。担当理事の岡山さん、PJ事務局の小池さん（日本生協連）、首都大学東京の田村さんと井上さん、被爆者として埼玉県原爆被害者協議会副会長の久保山さんが参加しました。【写真右下】



3/2(金) 渋谷の日本生協連の会議室で、「未来につなぐ被爆の記憶」アーカイブ化PJが、この間のワークショップのトライアルを受けて今後の進め方の打ち合わせを行いました。【写真左】

(2) データ化プロジェクト

コーププラザ浦和で、ボランティアで作業に参加いただいているコープみらいの組合員さんたちと各県の被爆者団体が出版した証言集・体験記のデータ化（PDF化）作業を進めています。今までは自分たちがデータ化している証言を読みたいという感想もある

ので、作業後の茶話会で証言を読んで交流するなど、具体化を考えています。2/26の作業の折には中国新聞の取材もありました。【写真は2/26の作業と茶話会の様子です】



VII. 【奈良】「ピースかふえ」で2年間の県内原爆被害者の歩みの掘り起こしを報告

奈良県生協連などをつくる「ピースアクションをすすめる会」が3月21日、奈良市内で「ピースかふえ」を開きました。

「ノーモア・ヒバクシャを奈良から」をテーマに活動している入谷方直さんが「奈良県内の原爆被害者の取り組みと歩み～2年間の被爆体験の掘り起こしの中で」と題して報告。



2006年に解散した奈良県原爆被害者の会（わかくさの会）が発行した手記集『原爆へ 平和の鐘を』1～3巻を復刊させたいと、仏像を中心とした文化財修理技師としての本業のかたわら、関係者を一人ひとり訪ね歩いたことなど、地道なとりくみが語られました。

県立、国立国会図書館をはじめ各府県立、大学図書館などにおける1～3巻までの所在確認作業（2巻の現物はどこにも残っていません）。ご自身では手記を遺

さなかった初代会長・田中義治さんの証言内容を学校講演への子どもたちの感想文から再現していく試み。古い地方紙の記載事項をたどっての調査などから、わかくさの会は再建された会であり、その前身は「奈良県原爆被災者の会」であることなど、奈良県内の被爆者の会とそれを担った被爆者たちの歩みが次々に浮かび上がってくるさまは、驚くばかりでした。

誰かが掘り起こし伝えていかなければ「なかったこと」にされてしまう被爆者の存在、会の活動は、まるで歴史に埋もれた文化財のようでもあり、その修復にとりくんでおられる入谷さんならではの掘り起こし作業に目を開かれる思いがしました。

雨まじりの寒い日でしたが、被爆者・遺族を含め 60 人を超す人々が参加。現役の生協関係者だけでなく、わかくさの会を支え平和行進にも参加したという生協OBらの顔ぶれも見られました。

講演を受けてのグループ討議では、参加者たちが口々に感動を語り合いました。

「被爆者の話を聞いてよかった。手分けして聞きとりをして、皆で第4集をつくろう」

「パソコン作業など入谷さんのお手伝いをしたい」

「入谷さんに弟子入りして共に活動したい」など今後への希望も出されました。

「奈良は古くから歴史と文化をつないできたところ。奈良でしかできない平和活動が築けるはず」と入谷さん。“いにしえに学び未来につなぐ”という奈良の人々の誇りも感じられた催しでした。

VIII. 「ノーモア・ヒバクシャ通信」に関するアンケートにご協力を

継承する会では、「ノーモア・ヒバクシャ通信」（「通信」）をよりよいものにするために、アンケートを実施することにいたしました。同封「通信に関するアンケート」に、みなさまの忌憚のないご意見をお寄せくださいますよう、お願い申し上げます。

（〆切や回答方法など詳細については、「アンケート」をご覧ください。）